



運動史を「生活」で読む : 辻智子『繊維労働者の生活記録運動』

長, 志珠絵

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 50:69*-75*

(Issue Date)

2018-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/81010503>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010503>



書評

運動史を「生活」で読む—辻智子
『繊維労働者の生活記録運動』

長 志 珠 絵

戦後史の重要な掘りおこしでもあるサークル運動研究は、一方でジェンダー視点に乏しい。本書は「生活」をキーワードに、ジェンダー研究をふまえた新たな「女性」運動史の労作である。本書は2017年、第11回女性史学賞を授与された。本稿は授賞式でのコメントおよびそこでの討論を元に書評原稿とした。構成は以下である。

辻智子『繊維労働者の生活記録運動』北海道大学出版会 2015年

序章

- 1 生活記録と生活記録運動
- 2 先行研究
- 3 目的と方法

1章 生活綴方の始まり-1952年頃まで

- 1 1950年前後の労働組合
- 2 労組文化サークルから生活綴方へ
- 3 メンバーたち
- 4 生活綴方を書き始める

2章 生活綴方の広がり-1952-53年頃

- 1 現実の問題解決と生活綴方
- 2 工場の外とのつながり
- 3 労働組合と生活綴方
- 4 母についての生活綴方

3章 生活綴方の困難-1950年代半ば

- 1 生活綴方批判
- 2 批判への抵抗
- 3 生活綴方を書くということ

4章 女性労働者の葛藤と模索-1950年代後半-1960年代初頭

- 1 「なかまの中の結婚式」
- 2 女性にとっての結婚
- 3 「近代的女子労働者」像の問い直し
- 4 操業短縮と解雇・帰休
- 5 サークルの転換

補節 1950年代の繊維女性労働者とその意義

5章 1960年代以降のサークルと仲間たち

- 1 「五年目ごとのつどい」
- 2 女性たちの結婚とその後
- 3 なぜ書くのか

終章 結論 今後の課題

著者はそのあとがきに2010年御茶の水女子大学大学院人間文化研究科に提出された博士論文を元としたとある。また研究のベースの一つは社会教育とする。本書はジェンダー射程が導入されて以後の、「聞き書き」やアーカイブ論をふまえた新しい「女性史」叙述に意識的な著書と考える。また評者は年報『女性史学』の編集委員を1996年から2017年まで担当してきた経緯から、特に「女性史」をめぐる叙述方法や関心の推移に関心を寄せてきた、という立ち位置から、コメントとさせていただきたい。

生活綴方は社会教育の文脈では、戦前からの系譜や蓄積も豊富だが、本書が主題とする1950年代の生活綴方は、やまびこ学校の生活綴方運動と起点とする農村の生徒の作文ではなく、農村女性や特に集団就職をした工場労働者たちが担い、自分たちの生活を書きあい、読み合う運動とされる。他方で歴史学や文化研究の文脈では、文章を書き、ガリ版の多様な冊子として読み合い、闘争

の拠点とする営為は、1950年代論をベースに、地域の男性労働者を軸としたサークル運動として近年急速に、大量の雑誌発掘も含めて研究が蓄積されてきた。書き手を取り巻く労働組合運動、社会運動とその闘争が文化研究としての新しい方法を伴って再評価・再発見されることで、歴史研究としては例えば1950年代像の意味とその忘却が問われ、闘争の現場からいかに多くの思想的営為と新しい表現が登場するか、テキスト研究として、特に文学研究としては、「記録」をどのように読みとくのか、方法論的営みも伴う。

生活記録としての生活綴方やサークル詩はその主要な表現形態の一つであり、他にもルポルタージュや映画、戦争画や版画などの絵画表現なども含め、文学の鳥羽耕史はこの時代を「記録の時代」と捉え、その軸に「闘争」を置く。また1950年代論は過去の再発見にとどまらない。例えば関西では鶴見和子文庫の寄贈を受け、文献整理と共同研究を進めた京都文教大学人間学研究所主催（西川祐子氏によるプロジェクト）で2007年にはシンポジウムが持たれ、著書のご研究の主人公の一人でもある、労組の指導者であり、裁判闘争後は四日市の公害運動を主導した澤井余四郎さんや『山びこ学校』の生徒側の実践者も登壇・講演された。著者もご著書の副題を「1950年代サークル運動と若者たちの自己形成」とする。このように生活記録運動は今日、実践を通して社会の仕組みを見抜く思想と方法を、書き手の側が身につけていく点に特徴とその魅力、普遍性をもつといえるだろう。

またおびたしい「記録」も新たな記録論、記録保持者とどのような関係を作っていくのか、アーカイブ論としても考える必要がある。

個人的なことでは辻さんのお名前は2007年、文教大のシンポの際、四日市の生活記録運動を研究している意欲的な世代の登場と存在として論文を拝読し、澤井氏がお持ちであった膨大な資料を「紡績女子工具生活記録集」として翻刻されていたことを知った。本書は生活綴方を研究対象とするだけでなく、過去の生活記録実践を活字資料として広く世に送り出し、作ってきた新たな世代の手によることになる。

長々と生活記録運動を取り巻く研究動向が新しいウエーブであることを述べてきたが、辻さんのお仕事は、生活記録運動・生活綴方と地域労組のサークル

活動の2つの記録運動が交差する地点での営みであるとともに、その対象が紡績女子労働者であることから、ジェンダー化された労働者像やジェンダーブラインドな組合運動、それらを前提としてきたサークル運動論研究にも竿を指す意味を持つ、またそのキーワードを「生活」にもつという意味で女性史研究という観点からその独自性が際立つ研究であると考えられる。

まず本書の構成は序章と終章を除いて5章立てである。その方法は主に1950年前半から1960年代にかけて高度経済成長の起点となっていく戦後の四日市の紡績工場、泊工場で、長野県から集団就職してきた女性労働者たちによる「生活を記録する会」を、その生活記録を未公開資料やインタビューも踏まえて読みとく。戦後直後占領期での労使協調路線から逆コースを経て占領末期の1950年以降、総評に加盟した、泊工場労働組合が、賃上げやストなど活発化する動きが、労働組合とその実践や闘争の持つ具体的な歴史性をともなって丁寧に論述されている。左翼用語であった「サークル」用語は実践の中でも労働組合運動と一体のものであり、経営者側は生活記録の書き手はアカであるとして、その分断工作を実家にまで及ぼしていた。こうした「言葉」をめぐる生々しい政治とそこに抗する彼女たちのあり方や、1954年での近江絹糸の人権争議がいかに普遍性を持ったか、記録運動の内側から内在的に描く、という方法が一貫して貫かれている。

またテキストの読みという点では、生活綴方を書かれたテキストとしてだけでなく、インタビューや参与観察も含め、立体的に読み解く方法を模索している点を特徴とする。特に書き手が対象化した「生活」を読みとく点が本書の最大の特徴だ。「生活」——と一口に言っても、寮生活者にとっての生活は居住空間の絶望的な狭さへの気づきからその不平等性、人権意識としての認識地平の獲得、職位の違う男性職員への現実認識への批判、組合を通じた労働条件の向上問題として他の工場へと広げていく。著者は主にこうした様々な発見を「いづれ村に帰る」、つまり熟練労働者にはならないと経営者から見なされた、いわばジェンダー化された労働者像とこれに対置する自己形成史として描く論理構成を取る。ジェンダー研究は政治世界を軸に、公と私の見せかけの分離を見破るが、ここでは塙のなかの労働者の生活をその当事者が自己認識として記録

した一という資料のあり方に密着した生活史研究の視点が、「いずれ村に帰る」と見なされた、ジェンダー化された労働者世界を読みとく方法的に新たな可能性のある事例研究ともなっている。

また「書くこと」を通じての社会の仕組みを見抜く力は、村の歴史、特に「母の歴史」として認識されている点も特徴だろう。生活記録運動を介した「母の歴史」が発見する“母”たちは集合表象としての“母”ではなく、個人史の集積である点で、怒りや悲しみ、共感が交錯する。逆にかつての歴史主体論争に関わる「母」が匿名の集合体であったことが明らかとなる。また組合運動の中での恋愛とその負荷や分断の有りようが、女性労働者及び記録運動にどのように影響を及ぼすのか。労働組合文化の不協和音をめぐる著者の筆致は抑圧性よりはむしろ、良妻賢母的な女性労働者像をめぐる揺らぎや新しい形式の結婚式など、新たな女性労働者像の自己実践として描く側に力点を置く。

いずれにせよ本書は1950年代サークル運動的関心を出発点に、繊維産業の女性労働者の「書くこと」を追うが、その独自性は、副題の「自己形成」という視点が、4章や5章として、本の構成となって生かされることで、従来の時期区分や対象となる思考が始まる場所や「生活」そのものが変化していく点だろう。著者は書き手が得た「書くこと」のその後を澤井余四郎氏の裁判闘争とその影響や労組の担い手いに対する操業短縮を理由とした解雇も含めた運動の方向転換や退潮にとどまらず、帰村先の村での生活と苦悩、違和感も含めた記録運動として再発見し、書き手にも再発見を促し、追いつける。このため本書が描く生活記録運動としての生活綴方は、内在的に1950年代にとどまるものではなく、農村での農家の嫁としての「生活」を場として高度経済成長を射程に入れることになる。思考の舞台は、工場から農村へ、塙の中の個別事例からより普遍的な広がりを持つ世界へと移る。会が5年ごとの振り返りを行っていたことや、それでも「書かない」メンバーの存在にも著者は注目を促す。著者自身もサークル活動の「今」にかかわり、書かれる対象にもなる。この結果、本書が描く生活記録運動は、都市の工場から農村へと移動し、農村から都市への移動を描く高度経済成長像とは異なる「生活史」の持つ重層性、生活が政治に取り巻かれている姿が立ち現れる。文教大学シンポジウムでの農村と都市は、

村での子どもの作文と工場地帯での労働者を対比させる試みだったが、本書はこの課題を書き手に即して配置して見せたことになる。

著者は学生時代でのパウロフレイレの著作の出会いを研究の出発点にあげるが、「自己形成史」という視点を貫くことで、ある時間軸や特定の運動だけを切り取り、いわば特権化してしまう運動論的手法や、本書の中の登場人物の一人となる叙述の試みを行ってみせるなど、聞き手と研究者との間の緊張関係を方法論として模索している。

このように同書はジェンダー射程を駆使した女性史叙述であるが、改めて問いとして投げかけられているのは、女性史叙述にとっての何を史料として見出すのか、この点だろう。鶴見文庫もそうだが、個人情報という点で個人記録は様々なハードルが立ち上がりつつある。記録とは何か、参与観察と記録はどのような関係にあるのか、アーカイヴ構築とは何か等、様々な議論が可能だと思う。

以上述べてきたように、本書は紡績女性労働者をめぐる新たな生活史研究である。故脇田晴子氏が東大出版会から出した女性史叙述の最後のシリーズ（『日本女性生活史』全5巻）は“公的”世界と交錯する「生活史」を問うものだった。女性史学賞が節目を迎えた今回、新たな時代の挑戦的な女性史の労作が生活史をキーワードとすることに敬意を表したい。

書評

運動史を「生活」で読む—辻智子 『繊維労働者の生活記録運動』

長 志 珠 絵

サマリ

辻智子『繊維労働者の生活記録運動』は、戦前からの自己啓発運動であり生活記録実践でもあった「生活綴方」の系譜を縦糸に、1950年代の職場サークル運動を横糸とし、特に高度経済成長前の主要な産業であった繊維産業の女性労働者の「書くこと」の実践に関わる資史料を総合的に掘り起こし、個々のライフストーリーを織り成した著作である。本書評は、新たな女性史の叙述として注目した。

キーワード：サークル運動、生活史、女性労働者、生活記録運動、戦後女性史